

## じっと耐える

園長 児嶋 草次郎

新型コロナ感染症が収まりません。新聞の報道では、6月末で世界の感染者は1000万人を突破し、死者は、7月に入って50万人を越えました。特にアメリカの流行は深刻で、人口3億2700万人で感染者288万人、死者12万人（7月7日付新聞）と出ていました。日本に比べると桁違いに多く、アメリカにおける貧困の格差、生活文化の違いなどが指摘されています。日本も油断はできず、第二波の兆候が現れつつあります。東京ではこの頃感染者数が100人を越える日が続いており、宮崎でも85日ぶりに新たな感染者が出ました。早くワクチンをと祈るような毎日です。

そんな時今度は、隣の熊本県で、大雨で球磨川が氾濫、多くの家が水没し、死者も40人以上という災害が発生しています（7月4日）。踏んだり蹴ったりとはこのような出来事を言うのでしょうか。「天よ！いい加減にしてくれ！」と言いたくなります。被災者の皆様には、心よりお見舞い申し上げます。じっと耐えるしかないのでしょうか。

以下、「石井記念のゆり幼稚園」落成式（6月21日）での挨拶と、「児嶋琥一郎・登美記念式」（7月5日）での挨拶を掲載させていただきます。

皆様、本日は、幼保連携型認定こども園石井記念のゆり幼稚園の移転改築を祝う落成式に御出席いただきまして、ありがとうございます。3月末に完成し、4月1日から幼稚園としてスタートしておりましたが、新型コロナウイルスの感染予防のため、約2か月遅れてしまいましたこと、まだ油断できない状況にありまして、こうして三密防止の形で行っておりますことにつきまして、おわび申し上げます。

さて、のゆり幼稚園前身の石井記念のゆり保育園は昭和33年に開設されております。戦後昭和20年、石井記念友愛社は、戦災孤児のために、石井十次の岡山孤児院の理念を引き継ぐ事業として再スタートしております。岡山孤児院解散からすでに20年という年月が経過しておりましたが、幸い土地と建物はほぼそのまま残されておりました。そして、その土地では、石井十次の理想郷建設のための戦士として大地を開拓し、石井十次亡き後もこの土地を守っていた人々が、そのまま暮しておられました。戦後間もない頃であり国民みんなが貧しく、孤児救済事業は大変困難な生活を強いられました。一方この地域の人々の農業も家族総出の手作業で、朝から晩まで働かねばやっちはいけないような状況にありました。小さい子供たちを守る人がいなく、不幸な事件も起きておりました。

その子供たちの命を守る場所として始まったのが、石井記念のゆり保育園でありました。先ほども申しました昭和33年であります。その後子供たちも、保育所の保母に守られ安全安心な環境の中でスクスク育ったわけでありました。

時代も進み子供たちも巣立ち、当然この地での使命を終えてもよかったですのですが、逆にこの地域外から通ってくる子供が増えていきました。このすばらしい自然環境と、そのあたたか

な保育の質に魅力を感じられる保護者の方々が、わざわざ遠くから自家用車で送迎される保育園へと徐々に変身していったのであります。

そして、平成の世の中になり、この高台である木城町中原地域から西都市茶臼原地域にかけてほぼ過疎化してしまい、のゆりのほとんどの利用児は、西都市管轄でありながら、木城町の町の方から越境して通ってくるというような、変則的な状況の中に置かれることになってしまいました。

設立後 60 年以上がたち、建物も老朽化し、その改築をするにあたって、この課題を検討しなければならぬ時がやってきたのです。このゆり保育園に関して石井記念友愛社が抱える課題は他にもいくつかありました。さらに新たな事業を展開しようとする時は、課題克服と今後の 10 年 20 年、次の時代にいかに継承していけるのかを想定しなければなりません。

一つ目の課題は、西都市、木城町、そして県に御相談し、木城町側に移転改築することでクリアできました。今日は西都市長様も御出席くださっていますが、長い間、御支援御指導いただきましてありがとうございました。現在、西都市側から通っている子供さんは 2 名ですが、今後もしっかり安心・安全は守ってまいります。

そして、受入れてくださった木城町長様を始め、町議会議員の皆様、そして役場の担当者の皆様ありがとうございます。木城町の御理解と御支援がなければ、この移転改築事業は実現できませんでした。もちろん、今日は御出席いただいておりますが、御指導・御支援いただいた国・県担当局にも感謝申し上げます。

二つ目の長年の課題は児童養護施設石井記念友愛園の幼児さんの社会性養成のために、幼稚園に通わせることであります。もともとのゆり保育園は、児童養護施設石井記念友愛園の幼児棟から分離してできたという経緯があり、我々の意識としては、一体的なものとしてスタートしたわけです。しかしその後、法整備が進む中で、友愛園の幼児は保育園には通えなくなってしまいました。今回認定こども園化することでようやく通えることになりました。悲願、宿願がようやく達成できました。

三つ目の課題であります。石井記念友愛園に隣接する土地に大量のゴミが放置されて来たのであります。石井十次の時代に、この土地に農家として独立したある人の息子さんがゴミを集め始めたのであります。障がいを持っておられました。その当時は、取り締まる法律もなく、だれも口が出せませんでした。この方が高齢化して亡くなったのを機に、その土地を石井記念友愛社で買いもどし、このゆり幼児園の隣接地でもありますので、のゆり、友愛園の子供たちの遊び場として整備しようと計画したのであります。もともとは、石井十次と職員・子供たちが開拓した神聖な土地であります。汚れたままで、次の世代に押しつけてはならないとも考えました。この課題につきまは、まだ解決しておりません。その量があまりに多く、その片付けに千万単位の費用がかかることが分かり、立ち止まっております。皆様方のお知恵をお借りできればと思います。

四つ目の課題です。このゆり幼児園の新たな用地は、木城町の管理するこの中原運動公園の一部を地区の皆さんの御理解もあり分けていただきました。この地からは豊富な水が湧き出しております。話は 400 年以上過去にさかのぼります。九州の関ヶ原の戦いといわれる根白坂合戦が行われたのがまさにこの地です。1587 年です。豊臣秀吉の軍と薩摩の島津義久軍合わせて 10 万以上の兵が戦った場所です。

根白坂はここから数百メートルの場所であり、この湧水の出るこの場所には、豊臣軍の陣地が構えられたであろうと私は想像しております。皆様あとで、この園舎の 2 階から見回していただ

きたいのですが、当時、薩摩街道と呼ばれた木城西都線が見渡せます。

この戦いの9年前の薩摩と大分の太友との戦いは、高城川合戦と呼ばれました。この戦いの後には、勝者の薩摩は、亡くなった人々を弔うため300人の僧を集めたと言われています。川南にはその供養塔が残っています。ところがこの根白坂合戦の戦死者たちをどう弔ったのかということが不明のままなのです。おそらく1000人単位の若者がこの地で亡くなっていると私は想像しています。

石井十次はこの地に理想郷を作ることがその弔いになるのではないかと思ったのではないかと。私はそう思い、十次日誌の中に記述を探してみましたがありませんでした。今の所証拠はありません。四つ目の課題というのは、小さくてもよいから、弔う形あるものを作ること、そして、次の世代の子供たちにその歴史的事実を伝えるものを作ることです。この二つは今回なんとか実現できております。この敷地の鬼門の場所に小さな社(やしろ)を作ることができましたし、園舎のホールにイラストライターの松本こーせい氏に根白坂合戦図を描いてもらい展示しております。皆様、これもぜひ見てください。

最後の課題であります。石井記念のゆり保育園がスタートした頃のこの地域の働き盛りの若者は、今、高齢者となられています。当時お世話になった方々の多くがこの世を去られました。遅くなって大変申し訳ないのですが、その世代への感謝の気持ちを何らかの形にすること。この新しい園舎の中に、その感謝のコーナーを作ることが最後の課題でありました。

「同胞の間」という地域交流スペースを作りました。お風呂もついています。時には、このグラウンドでグランドゴルフをした後、のゆりに寄っていただき、汗を流し、子供たちと一緒にお昼でも一緒に食べていただきたいと願っております。お年寄りの笑顔が子供の心を育てます。また、災害時の避難場所ともなりますので、地域の皆様に利用していただきたと思います。

お礼の挨拶が長くなってしまいました。あらためて、国・宮崎県・西都市・木城町そして地域の皆様に感謝申し上げます。そして、この園舎を建設するにおいて設計にたずさわってくださった団一級建設設計事務所、工事を行ってくださった株式会社桑原建設の皆様に感謝申し上げます。

この園舎は、岡山の建物をイメージしております。石井十次の理念と教育により近付いていくこと、それが、新しいのゆり幼稚園の新たな課題です。ここはほんとうに田舎ですけど、このグローバル化の世の中で、世界に羽ばたく次世代の子供たちを保育・教育することを新たな使命とします。子供たちは、その土地の自然環境と歴史と文化の中で、感性をみがき育っていきます。皆様方の引き続きの御指導・御支援をお願い致します。本日はありがとうございます。

本日は、児嶋虜一郎・登美記念式に御出席くださりまして、ありがとうございます。この記念式は創立記念日としても位置づけていまして、今年、ちょうど戦後75年、つまり創立75周年の年にあたります。昭和20年、石井記念友愛社が、石井十次先生の理念を引き継ぐ形で戦災孤児救済を目的にスタートする前後からの歴史を、子供たちも出席していますので、子供たち向けに話させていただきます。

二百数十年、江戸幕府は鎖国を続けましたが、アメリカの提督ペリーが神奈川県横須賀の浦賀に来航してから、日本人たちは一挙に目覚めて、世界の人々とお付き合いをするようになりました。世界の先進国に追いつけ押しこせの勢いで殖産興業に国は力を入れました。しかし、革命的な変革でしたので、色んな歪(ひず)みも出て、多くの子供たちが犠牲となりました。明治から大正の初めにかけて、それらの子供たちを救い教育して社会に自立させたのが、石井十次先生です。先ほど牧師先生も言われたように、子供の教育は国家の礎なのです。石井十次先生は、社会

から落ちこぼれた子供たちを救い出し最高の教育をさずけ、大正3年1月30日に亡くなりました。

一方、この1月30日に生まれたのが、今日私たちが菊の花をささげた児嶋琥一郎先生です。石井十次先生は、自分の孫が生まれた知らせを聞いて、うなずいてこの世を去られたそうです。そういう宿命のもとに児嶋琥一郎先生は生まれました。

明治時代の私たちの先人たちの努力で、日本は、世界の先進国の仲間に入ることができました。しかしそのことは、世界各地の色々なトラブルに巻き込まれていくことも意味しました。戦争もその一つです。人類の歴史を見ると戦争ばかりしているようにも見えます。アメリカ、イギリス、ドイツ、フランス等の植民地政策に追随するような流れになってしまい、戦争にまきこまれていくことになります。

太平洋戦争では、アメリカ、イギリス、フランス等やアジアの人々を敵に回すことになってしまいます。軍人も一般人も、多くの人々が戦争によって亡くなりました。世界各地で今の日本の人口の半分くらいの人々が亡くなったようです(第二次世界大戦)。日本人はこの太平洋戦争で300万人以上の人々が亡くなったと言われています。日本はこの戦いで負けて、日本各地の町々は、アメリカ軍の空襲で焼け野が原になってしまいました。みんなも知っているように広島と長崎には原子爆弾も落とされました。

石井十次先生の時もそうでしたけど、天災、人災(戦争は人災です)で取り残されてしまうのは、子供たちです。大人はなんとか自分の力で危機から抜け出そうとします。はい上がろうとしますが、子供は無理です。

児嶋琥一郎先生は、画家児嶋虎次郎(児嶋虎次郎はペンネーム)の長男として、先ほど話しましたように大正3年1月30日に生まれました。なぜ石井十次の孫かと言いますと、児嶋虎次郎は、石井十次の長女石井友と結婚したのです。児嶋虎次郎については、石井十次資料館の隣の研修館に絵が何枚も展示してありますので、子供たちも知っていると思います。特に高校生は3年に一度は倉敷の大原美術館に行きますので、より詳しく知っています。

児嶋琥一郎先生は岡山で虎次郎の息子として育ち、東京大学に進学し、東洋の歴史を学びました。大学で歴史を学ぶということは、学者か学校の先生を志していたのかもしれませんが。ところが、先ほどの戦争が児嶋先生の夢を打ちくだきました。当時は徴兵制度というのがあり、一定の年齢になったら、有無を言わず軍隊で軍人として訓練を受けねばなりません。そして派遣された先は、当時満州といわれたモンゴルの奥地ノモンハンというところでした。ここで今のロシア軍と戦いました。日本はその戦いに負けるのですが、児嶋先生はかろうじて生きて帰ることができました。その後再び召集され、今度は高鍋に派遣されました。その頃日本は敗戦間近で、沖縄にアメリカ軍が上陸し、壮絶な地上戦をしていました。やがて九州にも上陸するだろうからと、それに備えていたのです。沖縄でもそうでしたが、広島・長崎にアメリカは原爆を落とし、多くの民間人の命をも奪いました。そしてようやく日本は無条件降伏をしました。戦争に負けたのです。

昭和20年8月高鍋で除隊、つまり徴兵から解放された児嶋先生は、10月には茶臼原に登って来て、「石井記念友愛社」という名前で、孤児たちの救済活動を始めます。児嶋先生も、子供の教育は、これからの社会の礎になると考えたのだと思います。戦争でお父さんやお母さんを失った子供たちが日本全国に多くいたのです。昭和23年の調査では全国に12万3000人の孤児がいた(沖縄はそれ以外に3000人)と言われていますが、実態はよくわからないようです。

石井十次の孫とは言え、児嶋琥一郎先生は福祉のことは何も分かりません。この時支援してく

ださったのが、高鍋町出身で石井十次先生の弟子でもあった柿原政一郎先生です。柿原先生は当時は実業家で、広島で原爆もあびましたが、幸い生き残ることができました。石井十次先生の後姿をずっと見て来られたかたです。この国家存亡の危機的状況の中で、広島で子供たちの惨状を見て、この子供たちを救い教育することを石井十次の孫である児嶋先生に託したのだらうと思います。誰かがやらなければ子供たちは野垂れ死にするしかないのです。柿原先生もまた、子供の教育が国家の礎だという価値観を持っていた方です。

児嶋先生はその時、すでに結婚していて、一緒に高鍋から付いて来たのが児嶋登美先生です。登美先生は高鍋出身で、両親は学校の先生でした。多分、柿原先生の紹介による見合い結婚でした。

最初の園舎は、現在も残っている岡山孤児院時代の建物である静養館や方舟館でした。入所第一陣は岡山から来た 21 名だったようです。福岡方面からも来たそうです。志を同じくする職員も次々に集まり、愛農塾（昭和 23 年）、友愛館（昭和 23 年）、日新館（昭和 25 年）、生命館（昭和 26 年）、三友館（昭和 27 年）、天心館（昭和 31 年）、幼児館（昭和 31 年）と、広い石井記念友愛社の敷地の中に、次々と小舎制の園舎が建っていきました。職員夫婦が子供たち 20 名前後と寝食を共にしながら指導しました。一番多い時に全体で 120 名ほどで、子供たちはそれぞれの園舎に分かれて自給自足の生活をしました。

今も子供たちみんなで米を作ったり野菜を作ったりしていますが、当時の自給自足の生活は非常に厳しいものでした。最初の頃は国からの支援もほとんどありませんので、今じゃ考えられないほど貧しいものでした。お米もあまりありませんので、サツマ芋を入れたり大根葉を入れたりしながら量を増やして雑炊のような御飯でした。日本を占領していたアメリカ軍からもらった食料や衣類（当時ララ物資と言いました）も大変貴重なものでした。フロや御飯は山から取って来た薪で炊きました。大きな子供たちは畑や水田で指導員と一緒に野菜作り、米作りに励みましたが、小さい子供たちの大切な仕事は、薪取りでした。ニワトリや豚も飼っていて、肉を食べたい時は、それらを殺さねばいただけませんでした。トラクターなどはもちろんありませんので、牛に引かせた犁（すき）で田畑を耕していました。乳牛も飼っていて、牛乳はそれらの牛からしぼったものを、みんなで分けて飲んでいました。当時は大人も子供も、みんなで手分けしてそれぞれ精一杯働くことで、一日一日が何とか送れていました。

私が生まれたのは昭和 24 年ですから、ちょうどその頃です。私は虜一郎先生の次男として静養館で生まれ、今事務所になっている旧三友館で 3 才から小学校 3 年生まで、子供たちと一緒に生活しました。

今ここにいる子供たちの生活は、当時に比べれば物質的には夢のように豊かで幸せな生活です。蛇口をひねればお湯が出て来るし、お風呂にも毎日入れます。毎日のお肉や魚のついた御飯が食べられるし、お菓子も何不自由なく食べられます。

その後、日本も経済的にも復興していき、社会構造の変化により公害など新たな社会問題も出て来て、みんなが貧しかった時代から貧困問題も様変わりしていきました。昭和 32 年、友愛園を半分に分けるような形で都城に新たな児童養護施設石井記念有隣園ができています。孤児救済の時代から、地域の貧困問題に対応する児童福祉施設にその使命も変っていったのです。

地域の問題と言えば、保育園の開設もそれに答えようとするものです。昭和 29 年に石井記念ひかり保育園、昭和 33 年に石井記念のゆり保育園が開設されています。この石井記念友愛社の周辺は農村地帯で、新たに開拓で入植した人々の子供たちを昼間、お父さんお母さんが安心して農業ができるように預かったのです。

敗戦で焦土と化した日本は、みんなのがんばりでみごとに復興し、敗戦から 19 年目には東海新幹線を作り、東京オリンピックを開催し、世界の人々を驚かせました。石井記念友愛社も新たな子供たちのニーズに答えるため、次々に保育園や施設を作っていました。今年、創立して 75 年という節目です。

以上、石井記念友愛社の歴史を簡単に振り返りました。ここに出席している子供たちに、今日の記念式から学ぶべきことを 3 点あげておきます。

①平和や幸せは保障されたものではないということ。日本は、太平洋戦争に敗戦してから 75 年、戦争をしていません。世界各地では今も戦いが行われていますが、この戦争のない平和が 75 年間続いて来たことを感謝しなければなりません。ここに居る子供たちがこれから大人になった時も平和が続くためにはどうしたらよいかを考えていかねばなりません。幸せも同じです。平和も幸せも誰かがプレゼントしてくれるものではありません。ここに居る一人一人成長して、いずれ社会に出ていきます。毎日御飯がしっかり食べられる幸せを社会人になっても続けていくために、今、何をしなければならないのかを考えてください。

②児嶋虜一郎先生は昭和 21 年に次のように書いています。「すくすくと伸びたる子として社会に送らん」。具体的には「肉体的に精神的に自然をして正ならしむる」。「指導者と共に起居を同じくさせ、自然にその家族の生活様式にとけこませ、躰をうける」。「農業生活の中に育成されたる精神的基礎は彼等をして、奮闘的前進をなさしめる」。

戦争という地獄の中からかろうじて生還することができた児嶋先生は、平和や幸せがいかにかアテにできないものかを実感していましたので、すくすくと伸びたる子として育て教育し、奮闘的に生きていける人格を身につけさせようとしたのです。これは、①の答えです。ここに居る子供たちも、そういう理念と教育の中でここで生活していることを自覚し、一日一日を大切にし、やがて自立する日に備えて自戒自規の生活を送りながら研鑽を積んでほしいと思います。奮闘的に生きる人間になるのです。そのことにより自分の幸せと平和を勝ち取っていくのです。

③時代は刻々と変化していきます。戦争はないけど、この 10 年ほど次々天災が襲って来ています。コロナ感染症も一種の天災です。昨日は、大雨で熊本県の球磨川が氾濫し、多くの家々が水没していました。大変な災害です。みんなは、これから、自分自身の小さな幸せだけ求めて生きるのではなく、このような社会状況の中で、世のため人のために活躍できる人材をめざしてほしいというのが三つ目の願いであり課題です。

今、施設は否定的にみられがちです。施設生活のマイナス面だけが強調されがちです。しかし、私は、これから人材養成施設として位置付け、世のため人のために貢献できる人材を輩出したいと願っています。実際みんなの先輩たちが自衛隊員になったり、児童福祉施設の職員になったり、学校の先生になったりしています。今大学 4 年の R 君は消防士をめざしています。

みんなも、先輩たちの後を追ってほしいと思います。石井十次先生は亡くなる時、一人ひとりが石井になって引き継いでほしいと言いました。今、天は、みんなに そのことを求めているのだと思います。天災や人災が集中する歴史の大きな節目の時には、世のため人のために活躍する人物が必ず出て来ます。石井十次先生も児嶋虜一郎先生もその使命をせおわされた人物でした。ここに居るみんなも、もしかしたらその使命を背負わされた人なのかもしれません。石井先生、児嶋先生に御縁のある場所で修行していることを誇りとし、石井先生や児嶋先生のように世のため人のためになるような大いなる志を持ち、その実現のために、日々努力してください。

本日は雨の中、御出席いただきありがとうございました。